
終わりし世界のネクロフィリア

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりし世界のネクロフィリア

【Zコード】

N7679X

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

滅びきってしまった世界、終わってしまった文明。壊れてしまつた二人の少女は、あてもなく荒野を行く。

あらゆる文明が衰退し、一面砂と岩ばかりになつた荒野。少女が立つ小高い丘に見える場所も、かつては緑にあふれ、人々の憩いの場所となつていた公園だった。それが今では、遠くを見渡すための高台にしかならない。

「あつちに瓦礫の山が見える……。行つてみる？」

少女は振り返りながら言つた。ワインクしているように見えるのは、もうすでに彼女の左目は一度と開かないからだつた。すぐぶる愛らしい造形をした少女だつたが、右肩から先は無く、服もボロボロで、穴の開いた箇所の奥には、つぎはぎのような跡が残つている肌が見えた。身長は百四十に満たないくらいで、齢は十を超えたか超えないか、のようによつて見える。

「うん。ごめんね、ネク」

ネクと呼ばれた少女の声にこたえたのは、酷く小さな少女だつた。……いや、少女だつた物体、だろうか。

「気にしないで。私も、することないから。行こうか、ロニカ」

ネクはロニカの元へと歩くと、彼女を左手一本で抱き上げ、背負つた。ロニカもネクと同じく天使と見紛うよつた愛らしい顔立ちをしているのだが、首から下は、人間ではありえない形相をしていた。両手両足はなく、腹も裂けていて臓物はなく、代わりとでもいうよう、旅に必要な小道具が詰められていた。

「……何度も確認するけど、本当にいいの？」

背中と左腕でロニカを背負いながら、ネクは聞いた。

「何が？」

「その、荷物入れみたいにしちゃつてて」

ネクの言葉に、ロニカは朗らかに笑つた。

「いいよ、いいよ。私、普段は何にもできないし、荷物持ちくらいするよ。……それに、結局は荷物、ネクが持つてることになるし。

ネクこそいいの？ 足手まといじゃない？」

ネクは首を振った。

二人は遙か先に見える瓦礫群……。かつて人間が栄耀栄華を築き、繁栄した大都市、そのなれの果てを目指して歩いていた。

そこにはきっと、口二力が求める新しい何がある。詳しいことはネクも知らないが、それを得るために、二人は共に滅びきつた後の世界を生きてきた。

戦争ですべての動植物が死滅した後の世界を。

見えていた瓦礫群は、近づいてみればそれは大きな都市だった。二人は久しぶりにかつての文明に想いを馳せた。

「すごいね、口二力」

「うん。ここにはあるかな、私の代え」

ネクと口二力は慣れた風に周りの地面を見回す。アスファルトで舗装された道を、大きな瓦礫がいくつも折り重なるようにしてふさいでいる。見上げれば、多くのビルが半壊した状態でそびえたつていた。未だに完全な状態で残っているものは一つとしてなく、一番まともなものでも、壁がはがれて中身がむき出しになっていた。

「じゃ、瓦礫どけるから、ちょっと待つてね」

「うん」

ネクはゆっくりと口二力をアスファルトの地面に横たえると、積み重なつて道をふさぐ瓦礫の前に立つ。

「よいしょ、っと」

彼女は一番手前にあつた一部を左手で持つと、軽い調子で引いた。砂埃が舞い、轟音が響き、瓦礫の山は少しだけ小さくなつた。力をかけすぎたせいか、ネクの左手の指の皮は、破れて血が流れていた。彼女はそれに構わず、次の瓦礫に手をかけ、引き抜いた。より一層低くなつた瓦礫の山と、さらに破れたネクの皮。彼女は自分の指を見ると、少しだけ驚いたような顔をした。

「口二力、ちょっと休憩」

「うん、わかつたよー」

ネクはロニカのそばまで歩くと、腰を下ろした。膝を丸めるようにして座ると、目を閉じた。

「大丈夫、ネク？ 何かあつたの？」

心配そうに、ロニカは聞いた。

「うん、ちょっと皮が破けちゃって。すぐ修復するから、待つて」
ネクは言いながら、自分の不調を悟っていた。まさか、瓦礫をどうか程度で皮が破けるとは思つていなかつた。自分もやわになつたものだ。若干の不安と共に、そう思つた。

「でも、ネク。あれ全部どけるんでしょ？」

「まあね」

「じゃあ、皮が破ける度に休んでたら、日が暮れちゃうんじやない？」

それもそうだな、とネクは相槌を打つた。

「じゃ、手が使い物にならなくなるまでやるか。ありがと、ロニカ」「気にしないで。頑張つてね、ネク」

ネクはぎこちなく微笑み返すと、修復しかけていた手を酷使して、瓦礫を次々にどかしていく。ロニカを背負つたネクが問題なく通れるほどに瓦礫をどかし終わるころには、ネクの左手の皮は真っ赤に染まつっていた。指先に至つては筋繊維まで見えて、握力もかなり落ちていた。

「おしまい。ここにロニカの探し物があるといいね」

「うん」

その左手でロニカを背負つと、ネクは奥へと進んでいく。

「左手、大丈夫？ 濡れてるけど」

「すぐに修復できるよ」

二人はあたりを見回して、瓦礫以外の何かがないかどうかを探しながら歩を進める。

「見たところ何もないね。ハズレかな」

「ビルの中にも入つてみようよ。もしかしたらアンドロイドが隠れ

住んでるかも」

その言葉を聞いて、ネクは嬉しそうに顔をゆがめた。

「そうだね。弱かつたらいいんだけど、どうだろ?」

ネクは近くにあつたビルの入り口を見つけると、嬉々とした表情で入つていいく。

「異とかないかな?」

「あるわけないよ。あつたとしても、私たちを傷つけるだけのものじゃない」

ネクはビルの中に入ると、獲物を見つけた鷹のよつな表情でありを見回す。広いエントランスには、かつての受け付けや待合用の椅子などの残骸が残つていた。他のビルと同じく、上に行く手段はことごとく崩壊しているが、それ以外の部分はある程度片づけられている。小さな石ころなどはたくさんあるが、外に転がっているような大きさの岩は端に寄せられたように並んでいた。

「いるよ、絶対に、いる」

ネクは不自然に固められた瓦礫の山の後ろに回つた。

「見つけた」

「……あ……」

そこにいたのは、二人と同じよつな少女だった。綺麗な顔立ちをして、両手がなく、心臓があつた部分からは機械のよつな手が生え、それは痙攣するかのように細かく動いていた。少女の目は大きく見開かれ、まるで怯えているかのようだった。

「壊れかけだね、口二力」

「そうだね。どれだけ『残つてる』かな?」

「わ、私、は、壊れていな、い」

そう主張する少女の声はぞわらぞらとした雑音がまじつていて、鈴のようだつただろう声はもはやスクランブル寸前のスピーカーのようだった。

「まだ自意識あるんだ。レア物だよ」

「ネク、早くやつちやおうよ」

口二力の言葉に、少女は肩を跳ねさせた。静かに首を振り、涙を流した。

「ゆ、ゆるし、て……」

「涙？ もしかしてあんた、元人間？」

ネクが興味深そうに聞いた。少女は必死の様子で頷いた。

「へえ、生体改造型つてまだ動いてたんだ。ねえ、あんたらつて痛いことも気持ちいいことも感じるつてホント？」

「は、はい」

怯えたまなざしのまま、少女は質問に答える。それが唯一の生き残る術だと考へてゐようだつた。

「ふうん。ねえねえ、口二力。私、一度『悲鳴』つて聞いてみたいんだけど。『あえぎ声』でもいいけどね」

「私は『悲鳴』がいいな。悲しい鳴き声。どんなのかわくわくしない？」

二人は朗らかに笑つてゐるが、そばで聞いてゐる少女は恐怖で凍り付いていた。

「よし、悲鳴なら、口二力の出番だね」

「うん、頑張っちゃうよ、私」

ネクは背負つた口二力を地面に下ろした。口二力は踏ん張るようにな全身に力を入れると、体の側面から嫌に細長い腕のような器官が八本、生えてきた。それは三節あり、まるで節足動物のように自在に動いた。

「よいしょ、と」

口二力がそういうと、細腕のありとあらゆる部分から刃物が生え、とたんに彼女の腕のようなものは凶器に変貌した。

「ひ……化物……！」

「心臓からマシンアーム生やしてあんたはなんなんだよ。じゃあ、口二力、そいつの『悲鳴』、聞かせてよ」

「うん、わかつた！」

「ひとつと笑うと、口二力は怯えて後ずさる少女に構わず、腕を

足のように使つて飛びかかつた。

「い、いや、いやあ、いやつ」

ハ本の腕で抱きしめるようにすると、少女の全身に数えきれないほどの刃物が食い込んだ。

「きやああああああああああ！」

痛みと恐怖に耐えきれなくなつた少女は、息を絞るように悲鳴を上げた。

「へえ、これが悲鳴かあ……」

言いながら、ロニカは手を動かす。少し手が動くたびに、ジャクジャクと少女の肉が切れ、血があふれ、少女に痛みをもたらす。

「た、助けて、赦して」

「ねえ、ネク、今の聞いた？　これって命乞うつてやつじやないかな！」

少女の体を弄びながら、ロニカは嬉しそうに聞く。

「たぶんそうじゃないかな。私もやつてみたいなあ。『オープン』」手持ち無沙汰にネクは言った。すると、彼女の右肩から、光の粒子があふれ、次第に腕の形を成していく。それは人の腕だったが、彼女には似合わないくらい大きな右腕だった。

「ダメだよ、ネク。あなたがやつたら一瞬で消しちゃうじやない。悲鳴を楽しむんだつたら、私のほうが向いてるよ？」

「……そうだよね。じゃ、もつと聞きたいから、もつと痛くしてあげてよ」

ネクはそういうと、光り輝く右腕を振るつた。するとその右腕は霧散し、後に残つたのは痛々しくもがれた痕がある右肩のみだった。

「うん、わかった」

ロニカは腕をただ動かすだけでなく、刃を抜き差しするように動かした。余計に痛みと流血が酷くなり、少女の意識は次第に遠のいていく。

「あ、ああ……お父様、お母様、私は、私は……」

それからしばらく、少女のうわ言のような独り言が続いた。それ

が途絶え、完全に少女が息絶えるまでには、一時間ほどかかった。

「あれ、もう動かなくなっちゃった」

ロニカがゴミでも捨てるかのように少女から手を放すと、少女の体はじしゃりと音を立てて落ちた。

「うーん、やつぱり生体改造型は耐久力がないよね。ま、それでも戦闘能力がほとんどなくなつてたからよかつたけど、マシンアームが生きてたら手こすつたかも」

ネクは少女に近づくと、穴だらけの体をまさぐる。

「ねえ、核はどこにあると思う？ 体の中かな、やつぱり」

ロニカが全身に穿つた刃物の痕を、ネクが指でせらりと広げる。

「手伝おうか、ネク」

「あ、お願ひしていい？」

「まかせて」

ネクが少女の残骸のそばから離れると、ロニカが覆いかぶさるようにして少女を解体していく。ネクは危険が近づいたらすぐロニカに言えるよう、視線をビルの外に向ける。しばらく、肉を裂く音がビルの中に響いた。

「あつたよ、核」

「ありがと、ロニカ」

ネクが振り向くと、そこには真っ赤に染まつたロニカと、赤い残骸と、拳大の機械核しか残つていなかつた。機械核は黒っぽい立方体で、ネクはその核を手に取ると、飲み込んだ。

「……どう、ネク」

「うん、アタリ。結構残つてた」

ネクは微笑むと、戦闘形態を解除し、だるま状態に戻つたロニカを背負つた。

「ねえ、ネク、次のビル行こうよ。もしかしたらあれがあるかもしれないし」

「そうだね」

二人は瓦礫となつたビル群を、楽しそうに歩いていく。

「今度生体改造型とあつたら、あえぎ声聞いてみたいな、ネク。たしか気持ちいいことするとあえぎ声つて出るんだっけ？」

「そつだつたっけ？まあ、いいや。脳みそ直接いじつて、快楽物質を直接投与したら、あえぎ声が出るかな。それとも、生殖行動で出るんだっけ？」

「生殖行動つて？」

「さあ？文献に書いてあつた。何をするのかは知らないけど」「一人は滅びきつた後の世界を、当てもなく歩いていく。

「……ねえ、ネク」

「なあに口二力」

その果てに訪れるものは、終焉。

「楽しみだね」

「楽しみ」

けれど、一人は最後まで、楽しみ切ることだらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679x/>

終わりし世界のネクロフィリア

2011年10月20日20時28分発行